

大学構内の一角で、春の訪れを静かに告げているのは「ミツマタ」の木です。撮影は3月上旬。まだ寒さの名残がある時期ですが、枝先にはすでに淡い黄色の花がほころび始め、周囲にやわらかな季節の気配を漂わせていました。葉が出る前に花を咲かせるため、細い枝いっぱい丸い花序が並び、その姿は冬景色の中に灯る小さな明かりのようにも見えます。

ミツマタ（三桠）はジンチョウゲ科の落葉低木で、枝が三つに分かれながら成長することから「三又（みつまた）」という名がつけました。中国原産で、日本には古くに渡来し、各地で栽培されています。樹皮の繊維は非常に丈夫でしなやかであり、和紙の原料として重要な植物です。特に日本銀行券の原料として利用されることで知られ、耐久性と独特の風合いを生み出しています。早春、まだ多くの植物が眠る中でいち早く花を咲かせるミツマタは、学内に春の始まりを知らせる存在として、毎年静かに人々の目を楽しませています。

